

伝統をつなぐ

穴水町中居における伝統漁の保存と継承そして伝播

安河内匠

建築デザインコース

地域の風土や歴史に根ざしたその土地特有の伝統漁は、地域活性化に有効な資源となる可能性を秘めている。しかし、それらの伝統漁は後継者不足などの課題から衰退の一途を辿っている。穴水町においても例外でなく、ボラ待ち漁などの伝統漁が存続の危機に瀕している。そこで、穴水町中居に伝統漁展示体験施設を提案する。そこでは、人を惹きつける魅力を持つ海を身近に感じられる仕掛けを施し、何度も訪れたい場を作り出す。また、伝統漁の展示だけでなく、体験学習や宿泊施設、カフェなどの機能を設け、地域住民と観光客の両者を呼び込み交流を促すことで、伝統漁の保存・伝播・継承のサイクルを誘発する。



建築意匠／図面、建築模型／h200×w1820×d910mm

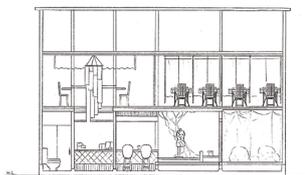
いかす

拠点から広がる古民家とまちの未来

高田有梨

建築デザインコース

富山県高岡市戸出には400年の歴史があり、今でもその変遷を語る古い家が建ち並ぶ。しかし近年は空き家の増加や取り壊しが相次いでいる。戸出の歴史の物証を守るため、空き家となっている古民家を活用し、人々の拠点となる空間を創り出すことで継続的な古民家の保護・まち並みの存続を目指す。“戸出らしい”拠点を提案するために、かつての主力産業である「繊維」を設計に組込む。「織り交ぜる」をテーマに、〈大きな拠点〉と〈小さな拠点〉をまちに作る。〈大きな拠点〉はまちや古民家の記憶を残す既存と、改修で生まれる新たな場や布による空間演出といった新規を組み合わせた固有の拠点であり、〈小さな拠点〉はまちなかの空きスペースをいかした繊維産業の追体験ワークショップや店先の暖簾などの町に統一して現れる布である。戸出らしさを“いかす”た拠点が生まれることで、戸出のための古民家の保護・まち並みの保全、地域活性化がなされる。



建築再生 / スチレンボード、バルサ材、布(麻・綿・合成繊維)

「にげ」の概念を活かした建築

古民家改修における空間提案

井上人太

建築デザインコース

建築において、建物全体を支えている多くの部分がある。それは単に全体の一部ではなく、部分こそが全体を形成する重要な役割を担っていると考える。そこで、部分を主体として扱い、部分から全体を考える順逆的な設計に試みる事で、新たな観点がみつかるのではないだろうか。また、自らの手で実寸大の制作を行う事でディテールの重要性やその働きへの理解度を高める。

部材接合部等には、部材の誤差を受け止め、美しく見せるための余裕である「にげ」という手法が用いられる。「にげ」を概念的に捉え直し、そのスケールを、全体を構成する空間・部屋単位に拡張する事で、既存の柱に依存しすぎない自由な設計を可能にする。さらに家全体に統一感を持たせるなど、「にげ」はつくる上だけでなく、デザインする上でも有効的である。



建築再生／建築模型・図面・在来工法サンプル／h1930×w2940×d1975mm

“縁”小路

輪島市における子どもたちの居場所のための仕掛け

林原穂波

建築デザインコース

車社会、少子化、遊びのデジタル化。目まぐるしく変化する現代社会において、子どもたちと、その心との安定を築くには、子どもたちの「居てもいい場所」が広がるような仕掛けが必要である。石川県輪島市の朝市通りから一本中に入った小路は、細く、街の息遣いが如実に滲み、介在する、小さな世界である。小路は、空き家、空き地の増加により、使われることが少なくなりつつある。そこで、小路と空き家、空き地に多様な子どもの居場所が生まれる種をまき、それらを、発見できるような気になる仕掛けで場所同士を結ぶ。居場所の発見とともに、子どもたちは居場所を選び、自分自身を世界に確立していく。点在させることで、子どもを介したコミュニティ、街での体験、街への愛着の構築も想定する。が子どもと子ども、子どもと大人、人と場所、人と時間を繋ぎ、広がっていく各段階で、人々が集まり、あり方を考える「縁」が散りばめられた、タイムカプセルのような小路を提案する。



建築再生／実測調査、模型、ドローイング、子どもたちとのワークショップ

風土に咲いた花

自然と共存する建築

奥谷幹汰

建築デザインコース

沖縄は琉球王朝時代の外来文化の受容、戦後の木造からRC造への転換など様々な外的要因が重なり、特有の文化を形成してきた。また年間通して気候が穏やかで過ごしやすい面もありながら、台風など自然の厳しさにもさらされる二面性を持っている。

このような沖縄の風土的特徴を最も表すものが「花ブロック」である。花ブロックとは主に通風や日照調整機能を持つスクリーンブロックで、沖縄らしい景観を生み出す。際立って模様の種類が多く、建物の視覚的印象を左右するほど多く用いられる。

そのような花ブロックを調査・試作することで、光や風などの自然環境と共存する沖縄らしい機能と空間を持つ建築デザインを試みた。



建築デザイン／図面、模型、コンクリートブロック

森で学ぶ

こどもとつくり続ける遊び場の提案

竹園莉帆

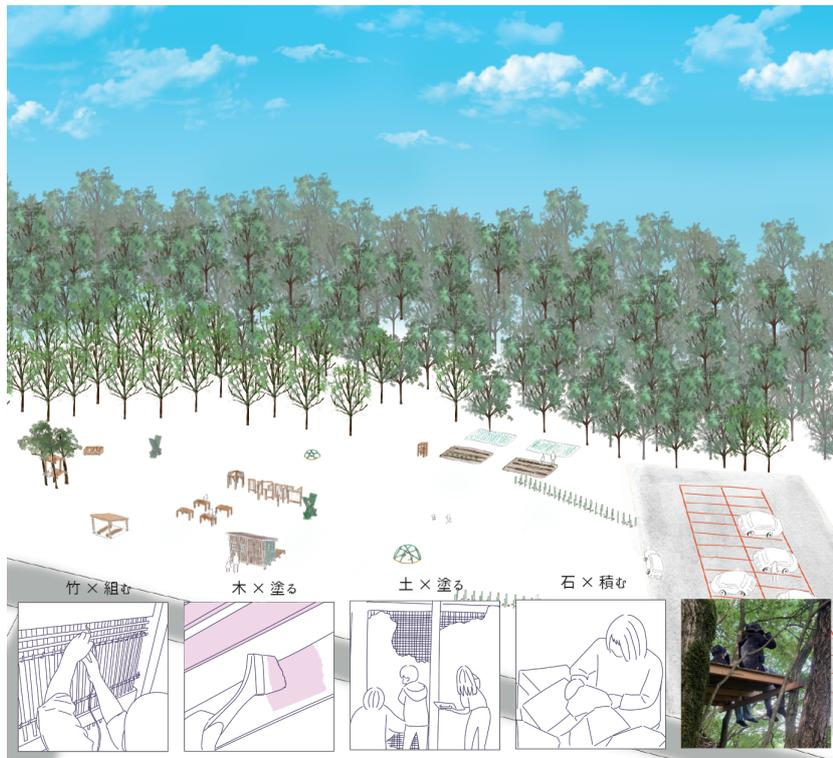
建築デザインコース

ゲームの普及とともに、昔と比べてこどもたちが自然の中で遊ぶことが減った。こどもたちに身体を動かす楽しさを知ってほしい、自然の中で遊ぶ機会を増やしてほしいと思い、こどもたちとつくり続ける遊び場を提案する。

中心地となる休憩所をつくることから始まり、ツリーハウスや竹明かりの制作などこどもたちとワークショップを行い、時間をかけながら、試行錯誤しながら、ワークショップが繰り返され、遊び場をつくり続けていく。

ワークショップは、木・竹・土などの素材と、組む・塗る・積むなどの動作に焦点をあて、それぞれを組み合わせる。素材は決めて、動作はこどもたちに選んでもらい、その上で制作物を考えるなど、こどもたちが自由に創造力を育むことができる場とする。

つくり続ける遊び場は、地元の森から始まり、やがて都市部や地方など様々な場所に広がっていく。



建築・地域デザイン／模型、図面

水のデザイン

地域に溢れ、沁み渡る図書館

浜田希一

建築デザインコース

水は私たちの身の周りに様々な形で存在し、溢れている。松尾芭蕉が「松風の 落ち葉か水の 音涼し」と詠んだように、水は私たちの五感に語り掛る。その様子に人々は魅了され、慣れを抱く。そして、水を生活の中に取り入れ、より身近なものにするために、人々は古くから知を巡らせる。このような私たちの水への介入は人と水が共に生きる美しい生活風景を形成してきた。

一方、水道の整備や水による災害、事故、管理の難しさから、水は危険なものとして扱われ、失われてしまった水との生活風景も少なくない。

そこで、水との暮らしのモデルとなる図書館とコミュニティセンターの複合施設を拠点として設計し、そこから水のように地域に溢れ、沁み渡る、様々なスケールの水のデザインの設計、提案を行い、人々の暮らしと調和する新しい水との生活風景を形成する呼び水とする。



建築デザイン／図面、模型

既存を活かす

引き算によるリノベーションの可能性

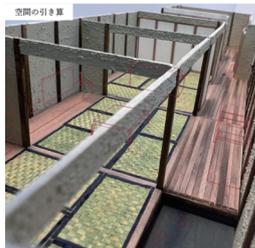
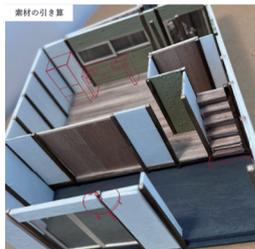
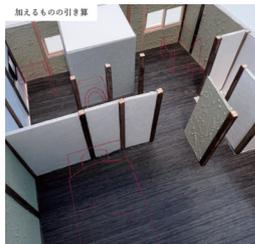
森田 粧子

建築デザインコース

「うなぎの寝床」と呼ばれる京都市らしいいまちなみが残る京都市東山区六原学区。しかし、町家が古い狭いといった理由により手放され、不動産の問題も重なり、新たに人が入ってくることもなく空き家となり放置されている例も多い。

そこで、「減築や一部解体。繰り返された改修の跡を取り除く。残されたものや再利用できないものを掃除。」という引き算。「構造、仕上げ、断熱、設備などを必要最低限」加えるものの引き算。これらの引き算によるリノベーションで、既存を活かした京町家らしい空間を提案する。

設計では、中間領域を設け、外とのつながりをつくることで、建物自体が狭くても、まち全体で暮らすような感覚を持てるようになり、豊かなまちづくりにつながっていくのではないかと考えた。



建築再生／図面、模型

時間を飾る

タイルを再利用する保存改修の提案

中村羽那

建築デザインコース

タイルは種類によって建物の時代がわかることや、並べ方や貼り方、組み合わせにより多様で豊かな表情をもつ。しかし近年、タイルが別の素材に変わり需要が減少し、古い建物の解体に伴い廃棄されるタイルも多い。そこで再利用する方法を提案することで、タイル建築の魅力を再発見してもらいたい。

今回の提案では上越市高田の雁木通りを対象に、まずは「町の景観」「住宅の内装」「人が集まる空間」の3つのしかけをデザインする。「町の景観」では、商店街の歩道や建物の外壁、「住宅の内装」では既存の建物を使い、入口から土間部分と水まわりに装飾を施す。「人が集まる空間」では新たに建物を設計し、タイルがより身近に感じられる空間を作る。これらの拠点から町全体にタイルデザインを広げ、魅力を伝えていく。



空間デザイン／図面、模型、タイル

建築のなかの建築

Design Build Boxを用いたリノベーション

岩月幹汰

建築デザインコース

手を動かして作ることは、考えることがたくさんある。設計段階にはない実物を扱うことの難しさ、考え方の違い、新しい発見がある。私は実際に作ることで経験できること、学べることをこの設計で伝えたい。近年、空き家が増加していると同時に、空き家を利用したセルフリノベーションを行う人も増えている。改修する空き家に住み込みで作業を行うことができれば、時間も費用も抑えてセルフリノベーションをすることができる。改修前の空き家に、暑さ寒さを凌ぐことができ、組み立て・分解・移動が行える箱型の建築(=Design Build Box)を制作することで、リノベーションを誰もが手軽にできるものにする。リノベーションでの活用のみならず、プライベート空間を利用したオンライン会議や休憩スペースとしての利用など様々な利用の可能性があるBoxとなっている。



建築再生/地元杉材、能登仁行和紙/h1955×w2730×d1940mm、h1955×w2400×d1320mm

茅葺きの可能性

能登の茅葺きと地域のフィールド調査をもとに

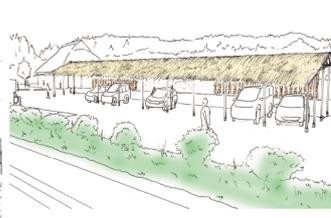
大茂悠美

建築デザインコース

日本の茅葺きは減少している。持続可能な建築が求められる現代において、身近にある自然素材で人々の暮らしと密接に結びついてきた茅葺きの可能性を探る。

茅葺きが比較的多く残っていた石川県輪島市三井町のかつての姿、30年前、15年前と比較して現在の調査を実施。激減しているが、茅葺き屋根2軒と上からトタン葺き屋根22軒が残っている。

それらの調査を踏まえ、普及可能な茅葺きの形、里山での茅を活かした暮らしの再発見を提案する。「スケール」と「時間」をキーワードに、大きな民家だけでなく、苦や小さな構造体、仮設的に短いサイクルのものなど、小さなスケールから始める。やがてそれらが様々なプロジェクトに展開し、大きなスケールとして地域での人々の交流や茅場が増えることによる茅の循環、茅葺きの循環に繋がる。



建築再生／茅葺きワークショップ／ワラ屋根実践／ドローイング／模型

土着する暮らしと循環のかたち

小屋×自然素材

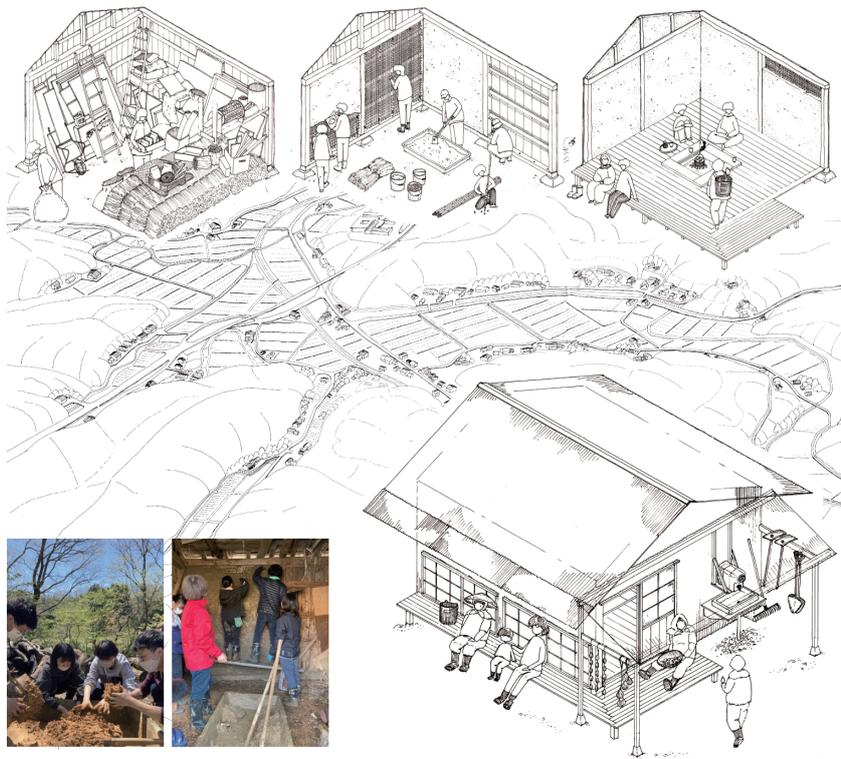
杉田茉優

建築デザインコース

“手を動かしてつくる”その行為は私たちの暮らしにあり、人は土や藁、竹、石、さまざまな自然に触れながら自然を知り、そして共生するために、暮らしの知恵を深めた。しかし現代では大量生産や効率性が重視され、「つくる」という行為は細分化・分業化された。手を動かしながらつくる行為が減少し、できあがったもので溢れかえるなかで、私たちはそのものがどういった素材からどうやってつくられたかをどこまで理解できているのだろうか。

私は、石川県輪島市三井町の市ノ坂を舞台に「土から生まれ土に還る」その自然の摂理のもと、建築素材としての地場の素材の可能性を探究し、失われつつある自然との共生を建築の観点から再構築することを目指す。

本設計では市ノ坂の空き小屋を地場の自然素材を用いて新たな暮らしの拠点へ改修する。ひとつの小屋からはじまり、やがていたるところで、みんなの手と地域の自然素材で小屋が紡がれていく。



建築再生／小屋修復／竹小舞土壁／版築ブロック／ドローイング／模型

地域と呼応するリノベーション

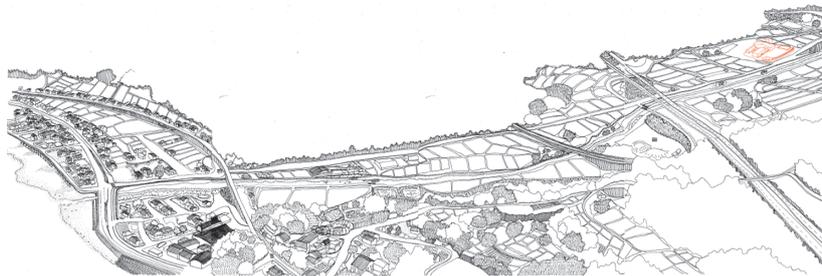
木浦を結ぶ場の存続に寄せて

田中菜々

建築デザインコース

界限を保有する地域住民と他地域からの来訪者にとって、地縁への参入と利用縁への理解は抵抗のあるものである。同時に、持続可能な地域づくりにおいて乗り越えるべき課題なのではないだろうか。

私の故郷である木浦地域では、豊かな自然と結びついた暮らしが営まれている。来年度を以って統廃合により廃校となる木浦小学校校舎の改修設計を試みた。少子高齢化が進む地域における廃校活用をテーマとし、コミュニティを一度緩め、外部が参入する隙をつくることによって持続可能な地域づくりの場となる。効率的で機能的なグリッドを飛び出し、校舎から校舎の外へ、敷地から地域へと縁が拡張していく。図書室機能の延長と学び・交流空間の拡張により、地縁と利用縁が共存する新たな居場所をつくる。



建築再生／模型、ドローイング、アーキヤド

「食と暮らし」再構築

伝統をいかした地域の交流のかたち

林紀歩

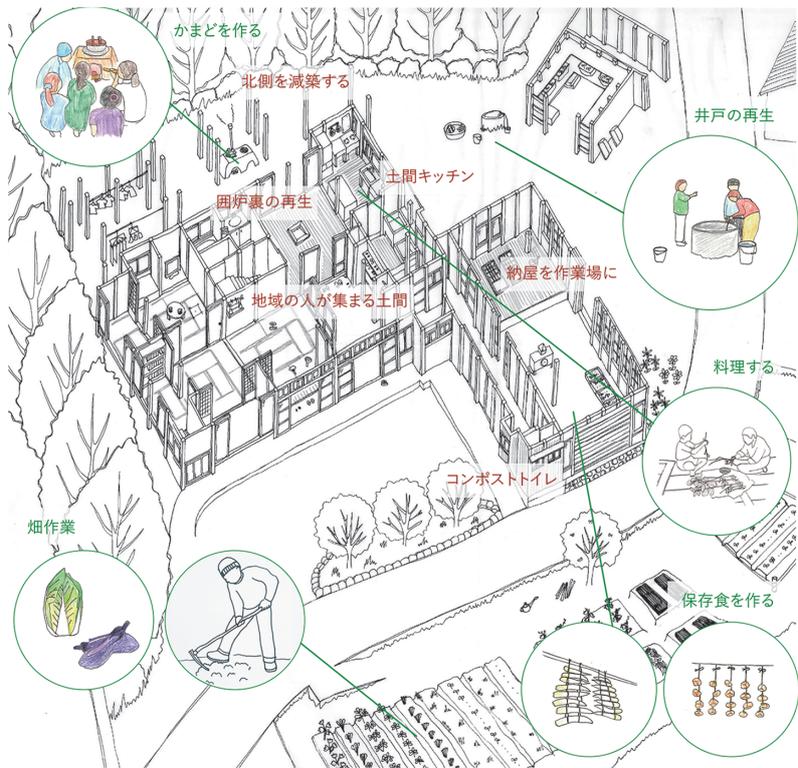
建築デザインコース

子どもの頃、祖母の家にいると近所
の人が育てた野菜を持ってきてくれ
て、そのまま玄關先で会話が始まるこ
とがよくあった。しかし近年は、隣人
の顔も知らないといった現状がある。
また、単身世帯の増加や共働き世帯
の増加によって、食事に時間をかける
人が減っている。

本設計では、食を中心にした暮らし
方を提案し、それを実践してもらうこ
とで、食から生まれる地域の人たちと
の交流について見直すきっかけを
持ってもらうことを目的としている。

また本設計では、2つの時間の流れ
に着目した。流れ続ける時間「年月」
と回転する時間「季節」だ。この2つ
の時間の流れに沿った、暮らしの様
子をスケッチなどで表現した。

食と暮らしが今も密接に関わってい
ると考えられる里山(富山県水見市
熊無)と、今後この暮らし方が広がっ
ていくことを想定した都市郊外(愛知
県豊橋市)の2つ敷地で設計を行う。



建築再生/実測調査/かまどづくり/ドローイング、模型

能登の里山集落の旧商店街へのしかけ

「時間」×「スケール」×「地域の価値観」をいかして

胥皓天

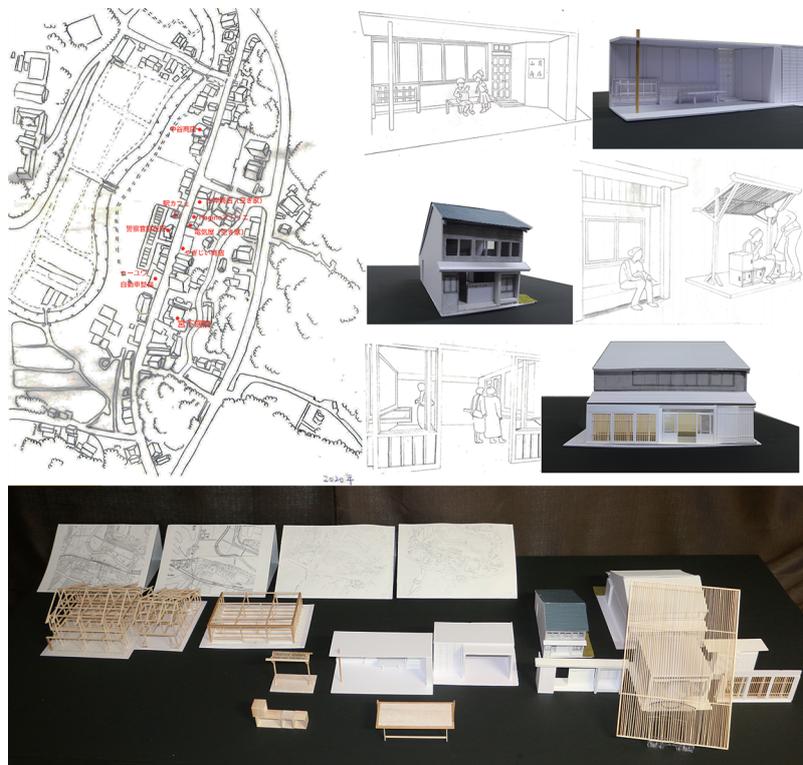
芸術文化学研究所

日本の山間部の商店街は、深刻な過疎問題に直面している。

本研究ではまず、日本各地の地方都市の商店街や空き店舗の再生・リノベーション事例を多数収集・分析した。さらにその中から、興味深い商店街について詳細な分析を行い、その結果、「スケール」「時間」「価値観」という三つのキーワードが導かれた。

次に、その展開として、能登半島にある輪島市三井町の旧三井駅前商店街を舞台に、過去・現在・未来へと時間をかけて、様々なスケールの提案を行い、古くて新しい価値をもつリノベーションの提案を行った。

ここでは商店街を昔の繁栄に戻すことを目指すのではなく、物々交換なども行い、里山の価値観を継承し、地域の価値を外へ売ってしまうのではなく、地域住民が主体となるような提案を試みた。



建築再生／フィールド調査／ドローイング、模型

今、またヒカリと出遭う

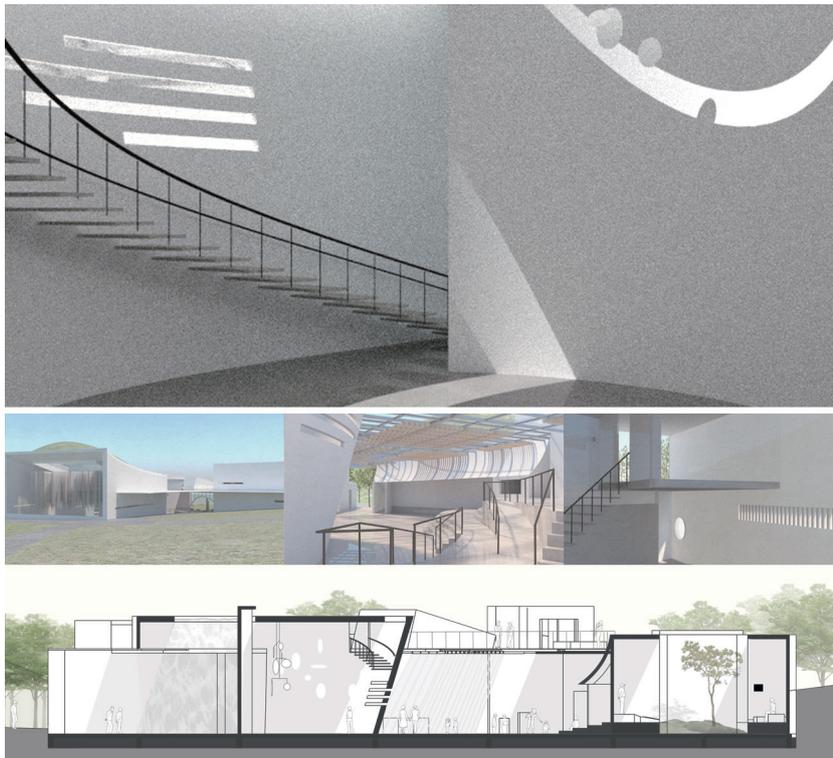
京都宝ヶ池における自然光による自然光のための美術館

加味根みのり

建築デザインコース

私たちのまわりには光が溢れている。特に日本は、至る所で人工光が多用され、白く煌々とした明るさが辺りを包んでいる。私は北欧への留学をきっかけに、日本の人工光の多さに疑問をもつようになった。暗さがあるからこそ光の美しさが際立つ、『陰翳礼讃』で谷崎潤一郎が語ったように、日本もかつては暗さの中に美を見出していた。

ここでは、あらためて自然光と向き合うための空間として、自然光そのものが作品となる美術館を提案する。その日の天気や周りの木々の移ろいなどによって刻一刻と変化するヒカリ作品を鑑賞し、自然と暮らすこれからの社会について今一度考えてもらいたい。



建築デザイン／模型・図面／パネルh2000×w1800mm 模型h1000×w1680×d1080mm

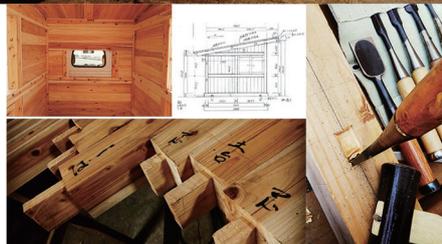
「つくる」ことから学ぶ 旅する小屋のかたち

勝然美紀

建築デザインコース

「建築する」とは何か。

実物からモノを考える機会が減っている日常において実際に「設計」したものを「かたち」づくる体験は、多くの学びと気づきを与える。もっと身近に自らの「住み処」をつくってみるという風向きがあってもいいのではないか。原初的な学びとして「動く小さな家」をテーマとした。昨今の「場所」や「所有」に左右される生き方や働き方に疑問を持ったこと、「時は金なり」の造りではなく、「人の暮らし」が「自然」とどう寄り添えるかという見方にも意識を向けている。木組みの「柔らかさ」を活かし、「揺れ」を受け流す「伝統木構法」。“自然”に対して「中立」であり、解体や再利用を経て土へと還る。また運搬的観点や費用の側面において軽トラの荷台にこの構法でつくる意味はどこにあるのかなど、今後も共に過ごしながら探っていく試みである。



建築デザイン、セルフビルド／木組み(伝統木構造)、手刻み、杉、アテ(能登ヒバ)／h1740×w2450×d1460mm

小さなしかけの積み重ね

長野県松本市上波田旧門前町における、境界の継時的デザイン

真関美夏

建築デザインコース

長野県松本市上波田。

旧野麦街道の面影を残すまち並みが残る一方で、近年は空き家、空き地の増加がみられる。

本計画は、都市計画的なマクロな視点からの提案ではなく、小さなしかけを時間をかけて連鎖的にまちに広げることで、まち並みの時間と地域の繋がりの持続を探る。

具体的には「うち」と「そと」の境界に着目し、本棟造古民家の保存活用を、「うちの境界である「間仕切り」「緑側」「天井・床」の3つの要素からのしかけを考える。また、「そと」の境界である「塀」を操作することで、家と地域間の繋がりをつくり、これからの塀のあり方を考える。

移住者が引っ越してくることをきっかけとしたストーリーに沿って5つの場面の順に、さまざまなスケールのしかけを継時的に散りばめる。

まち並みに時間が積み重ねられ、空間の繋がり、人の繋がりが続いていく。



2020

2025

2030

2035

story1
本棟造「間仕切り」



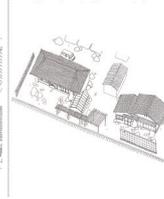
story2
道のくぼみ「束屋」



story3
平屋「縁側」



story4
2軒の連続した塀
「カーポートとバーゴラ」



story5
本棟造「床・天井」



建築デザイン、リノベーション／模型、図面／バナー h1200×w3000／模型 h900×w1000×d400mm

空のしたで想い繋ぐ ～流れる劇場～

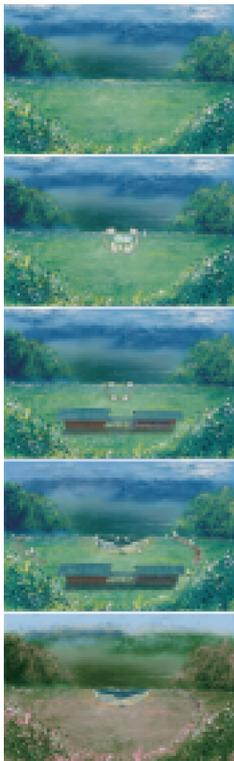
流れる劇場

桑原慎也

建築デザインコース

地域に根ざした小さな演劇拠点こそが文化を育む土壌なのではないか、と考えた。そして、時間とともに集う人や人の暮らしは変化していく。それに伴って、脈々と受け継がれる演劇の「物語」と時間を超えて変化し続ける劇場の「かたち」をデザインする。

敷地は、富山県高岡市にある水道つつじ公園。この公園の原っぱの上ではじまった小さな演劇活動が、徐々に大きくなるにつれて、それをとりまく演劇空間も大きくなっていくことを仮定した。設計では、原っぱでの簡易舞台装置、その後の芝居小屋、円形劇場、やがてそれらが廃墟になるまでを想定し、形が変わりながらも絶えずその場所で続いていく人々の営みの愛おしさを賛美する。



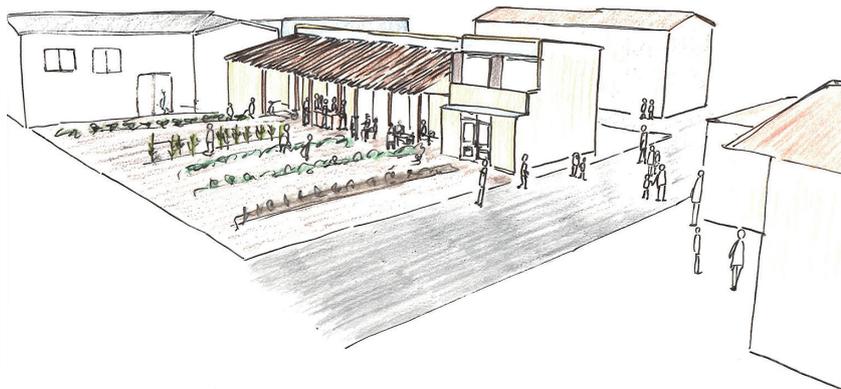
建築意匠／模型、図面、ドローイング

学生の自炊暮らしに関する研究 食とキッチンによるあらたな暮らしのデザイン

江端紀子

建築デザインコース

学生のひとり暮らしの食とキッチンに注目し、新たなライフスタイルを提案する。まず、現状調査を行い、次に各住戸単位で食とキッチンを重視した様々なリノベーションを提案する。そして建物全体から周辺地域へ展開し、食でつながるコミュニティを提案する。



建築デザイン／イメージバス

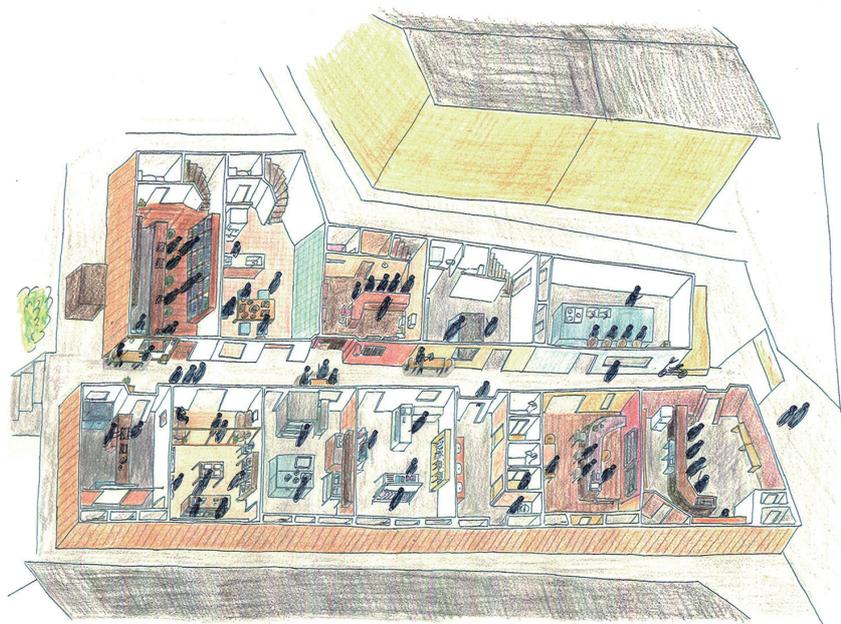
高岡大仏飲食店街

時間をかけたリノベーション手法の提案

玉橋 伶奈

建築デザインコース

築約50年の大仏飲食店街は、長い時間に様々な変化を遂げて空店舗が多い現在の姿になったと考えられる。ここではその過程を明らかにし、次に、過去の時間を継承し、将来の様々な変化に対応可能なものとするため、時間をかけたリノベーション手法を提案する。



建築デザイン、リノベーション／ドローイング

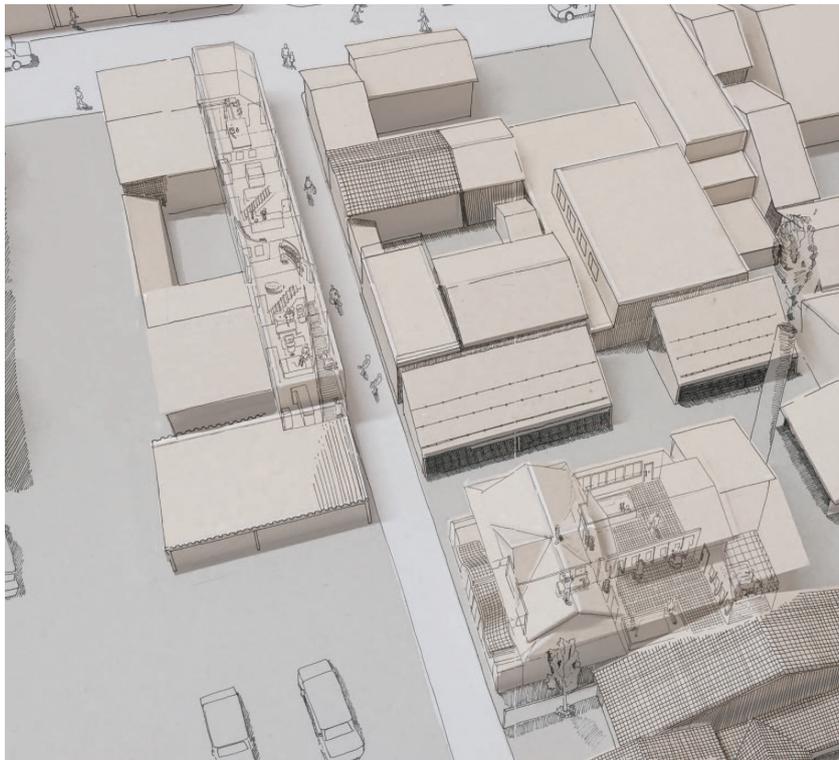
銭湯再考

高岡市の銭湯リノベーション計画

田村瑞帆

建築デザインコース

廃業した銭湯の再生を通じ、新たな非日常空間の創出と地域コミュニティの再生を試みる。まず約20年前に廃業した銭湯の実測調査し、次に来訪者と地域住民を繋ぎ、まちの交流の拠点としての再生案を提案する。減少する銭湯がこの先も存続することを願って。



建築意匠／図面、模型、スケッチ

